HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道帝国大学に入学した沖縄出身者
Author(s)	近藤, 健一郎
Citation	北海道大学大学文書館年報, 8, 1-16
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52330
Type	bulletin (article)
File Information	ARHUA8_001.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜論　　文＞

北海道帝国大学に入学した沖縄出身者

近藤　健一郎

はじめに

⑴　本稿の課題と関心

近代日本において、沖縄県は唯一高等教育機関[1)]をもたなかった県として知られる[2)]。日本政府が琉球処分によって琉球王国を廃して沖縄県を設置した（1879年）のち、沖縄戦によりそれが解体される（1945年）まで、沖縄県においては中学校と師範学校が最高学府であり続けた[3)]。もっとも高等教育機関が設置されていない道府県が沖縄県のみとなったのは、1920年代半ばである。原敬内閣が閣議決定した「高等諸学校創設及拡張計画」（1918年）が実現し、官立高等学校などが全国各地に新設された結果、沖縄県以外の道府県には何らかの高等教育機関が設けられることとなったのである。

こうしたなか、沖縄県の教育界・政界が高等教育機関とりわけ官立実業専門学校である水産学校を誘致しようとする一方[4)]、高等教育の場を求めて中学校卒業などののち他府県に進学した人も少なくなかった。この点にかかわってこれまでにも、太田朝敷や謝花昇などを沖縄県が派遣した1882年の「県費留学生」に関する研究や、伊波普猷など高等教育機関に学んだ人物を対象とした研究などがなされてきている[5)]。

しかし、近代沖縄においてどれくらいの人が高等教育機関で学んだのかについては、琉球処分期から日露戦後にかけての時期を対象とした東京への進学に関する納富香織の研究があるのみである。納富は、「明治28年～41年における在京沖縄留学生数の推移」を示し、東京でのそのような人々による同郷団体（沖縄青年会）の結成などとあわせて論じている[6)]。それによれば、1895年の31名から増減を繰り返しながら、1908年には奉職者14名のほかに89名の沖縄出身者が東京で学んでいたことが示される（進学準備を含む）。ここでの指摘は、在京者に限定されていることが注目される。東京以外の地で学んでいた人については、当然ながら、在京の団体である沖縄青年会による雑誌を史料としては不明とならざるをえない。では、沖縄で発行された雑誌などを史料とすることはできるであろうか。沖縄の中等教育機関の代表格は、琉球王国期からの歴史を有する沖縄県立第一中学校であり、1911年までは沖縄の中学校は同校のみであった[7)]。たとえば1915年12月発行の同校の『学友会雑誌』第24号によれば、1915年３月に卒業した56名のうち19名が軍学校も含めて進学の希望をもっていたこと、1914年および1915年に高等学校および専門学校に進学した過年度卒業生を含む15名の氏名とその進学先が記録されている。同様の記事は他の号にも

見出せる場合があるが、残念ながら同誌の現存状況は芳しくない。また卒業生名簿では、その編集時点で死亡している場合、多くは死亡、物故者、戦死者として名をとどめるのみである[8)]。このような研究および史料状況からすれば、近代沖縄においてどれくらいの人が高等教育機関で学んだのかについては明らかになっておらず、またそのような統計が得られるものでもないのである。

それでも筆者は、納富が提起する「留学生たちは、故郷・沖縄を離れ、何を学び、近代沖縄にどのような影響を与えたのか」[9)]という素朴な問いを、次のような関心から重要なものとして継承したいと考えている。

1920年代に入って沖縄および東京において各種研究会などがもたれ沖縄学・沖縄研究が盛んに取り組まれたとき、指導的な役割を果たしたのは、東京帝国大学で言語学を学び「沖縄学の祖」といわれる伊波普猷や、1921年の沖縄への旅以来関心を寄せた柳田国男などであった。そのような研究の場は沖縄、東京のちには台湾にあり、そこに集う人々は沖縄人（沖縄出身者）ばかりでなく、研究上沖縄に関心をいだいた大和人（非沖縄出身者）もいた。多くの場合教員やジャーナリストを生業としながら沖縄学の一翼を担っていた沖縄出身者には、沖縄の中等学校や師範学校で学んだ人だけでなく、沖縄以外の地にある高等教育機関に進学し学んだ人もいた。代表的な人物をあげれば、前者には沖縄県師範学校を卒業したのち教育畑を歩む島袋源一郎[10)]や、沖縄県立中学校卒業後に東京での遊学生活を経て沖縄の新聞社などで執筆活動を続けた末吉安恭（麦門冬）[11)]がおり、後者には京都帝国大学法科大学卒業後に沖縄の中等学校教員などを勤めた島袋全発[12)]がいる。これら沖縄学・沖縄研究にかかわる人は、さまざまな研究会を設けるとともに公私にわたり交流し、柳田国男や折口信夫などの非沖縄出身者も含めて相互に影響を受けながら研究していた[13)]。そのような人脈のつらなりを、各種会合への出席者としてその名が示されている人物にとどまらず、これまで注目されていない人々にも視野を広げてとらえることにより、沖縄研究の裾野を明らかにしていきたい。その裾野とは、沖縄研究の成果が公表される書籍・雑誌の読者として想定されるとともに、近い将来に沖縄研究を継承、発展させることの期待される人々であったことを意味する[14)]。

本研究は、このような関心から、高等教育機関で学んだ沖縄出身者を統計的な人数として把握しようとするにとどまらず、固有名詞を伴った個人として見出し、その沖縄内外での研究および社会的活動を明らかにすることをめざすものの一部である。そのためには、前述のような研究および史料状況ゆえに、植民地を含めた全国の高等教育機関ごとに調査を進めていくこととならざるをえない。その第一着手として、本稿では対象を北海道帝国大学（前身である札幌農学校、東北帝国大学農科大学も含む。以下、同様）に限定して、沖縄出身者たちの入学状況およびその特徴を明らかにする。対象を北海道帝国大学に限定するのは、沖縄から最も離れた高等教育機関であることも一因であるが、筆者の研究教育にとって最も着手しやすい環境にあるとともに、それが必要であるためである[15)]。そして他の高等教育機関への入学については別稿を期すこととする。

⑵　本稿の方法と構成

北海道帝国大学入学者の出身地に注目したこれまでの研究を参照するとき[16]、北海道帝国大学に入学した沖縄出身者を見出す基礎史料として、毎年刊行され続けた『札幌農学校一覧』『東北帝国大学農科大学一覧』『北海道帝国大学一覧』に掲載されている学生生徒の名簿がなにより重要であると考えられる。そこには在籍する学部や学年などごとに、氏名とその本籍地が示されているからである。本稿では、それに依拠して氏名および本籍地を悉皆調査することによって、北海道帝国大学に入学した沖縄出身者を明らかにする[17]。

ただし、この方法により沖縄出身者として把握できるのは、本籍地が沖縄県となっている人に限られるため、次のような場合は沖縄出身者として把握できない。たとえば、本人は沖縄で生まれ育ったにもかかわらず、親などが沖縄以外の出身のため、本籍地は親などのそれになっている場合や、北海道帝国大学入学前に沖縄県外に転籍した場合などである。逆に入学前に沖縄県へ転籍した場合には、沖縄での生活が一切なくても沖縄出身者として把握されることとなる。

沖縄出身者であっても把握できない場合については、今後、各種名簿、回想資料、同時代の各種記事などにより新たに見出すこともありうるが、本稿において前掲の各『一覧』以外により見出した例はない。沖縄差別ゆえに転籍した人が多いことはよく知られており[18]、そのなかには高等教育機関に進学した人も一定数いるものと思われるが、その調査は今後の課題に属する。なお本稿での調査において、在学中に沖縄県外へ転籍した人を１名見出したが転籍後も沖縄出身者として整理した。一方、1898年に沖縄県に徴兵令が全面的に施行されるまで、沖縄県への転籍は徴兵を合法的に回避できる方法であったため、そのような意図で転籍している人が含まれている可能性がある[19]。ただし北海道帝国大学入学者で、それに該当すると思われる人はいなかった。

ところで北海道帝国大学は、その前身である札幌農学校以来、帝国大学という名称で想起されるであろう「国家ノ須要ニ応スル学術技芸ヲ教授シ及蘊奥ヲ攻究スル」（1886年勅令第３号帝国大学令第１条）専門課程である分科大学、学部のみにより構成される学校・大学ではなかった。時期により組織名称は異なるが、その一つは、土木工学科・土木専門部や、森林科・林学実科、農学実科、水産学科・水産専門部などである。これらの課程の性格を、北海道帝国大学附属土木専門部規則（1919年９月施行）によって例示すれば、目的は「土木専門部ハ土木工学ニ関スル高等ノ教育ヲ授クルヲ以テ目的トス」（第１条）であり、その入学資格は「中学校ヲ卒業シタル者」およびそれに準じる者であった（第９条）[20]。また卒業時に授与される称号も学士ではなく得業士であった（第37条）[21]。このような実業専門教育の系列に属する実科、専門部を北海道帝国大学は有していたのである。それらのほかにもう一つ、専門課程に入学しようとする者への高等普通教育課程としての予習科、予科も設けられていた。このように北海道帝国大学には、第一に本科、分科大学、学部という専門課程のほか、第二にそこへの進学準備を主目的とする高等普通教育課程である予修科、予科、第三に入学資格において予科相当で実業専門教育課程である実科、専

門部が設けられていたのである[22]。

本稿では、高等教育機関として分科大学、学部以外の実業専門教育や高等普通教育の課程をも含めて把握しようとする趣旨から、予科や実科および専門部への入学者も対象とする。

それに関連して、前述の北海道帝国大学附属水産専門部が1935年３月に廃止されると同時に、函館高等水産学校が設置された（1944年に函館水産専門学校に名称変更）。この函館高等水産学校は、水産専門部を母体としていることに加え、1949年の新制北海道大学で設置される水産学部の母体の一つとなった[23]。そのような歴史に鑑みて、函館高等水産学校への入学者についても北海道帝国大学へのそれとみなし、本稿の対象に加えることとする。同校では、1935年度から1939年度の５年度分の『函館高等水産学校一覧』を刊行しており、それを史料として入学者を明らかにする[24]。

そして彼ら[25]がどのように北海道帝国大学へ入学したかを把握するために、入学前の中等学校歴を、北海道大学大学文書館が所蔵する入学願書、志願者名簿および沖縄県内の中等学校の同窓会名簿、卒業生名簿などに依拠して明らかにすることもあわせて行なう。

本稿では、第１節において以上の諸項目を一覧表として提示し、第２節においてその一覧表に基づき、沖縄出身者の基礎的な情報を統計的に整理しつつ、北海道帝国大学への沖縄出身者の入学の特徴を明らかにする。

表　北海道帝国大学に入学した沖縄出身者一覧

氏名	年	在籍学校・大学名	在籍学部等	在籍年級等	在学課程
黄金井　解三	1899	札幌農学校	予修科	第二年級	予科
	1900	札幌農学校	本科	第一年級	学部
	1901	札幌農学校	本科	第二年級	
	1902	札幌農学校	本科	第三年級	
	1903	札幌農学校	本科	第四年級	
宮城　源栄	1900	札幌農学校	予修科	第一年級	予科
	1901	札幌農学校	予修科	第二年級	
	1902	札幌農学校	本科	第一年級	学部
宮城　鉄夫	1903	札幌農学校	本科	第二年級	
	1904	札幌農学校	本科	第三年級	
	1905	札幌農学校	本科	第四年級	
	1906	札幌農学校	研究生		
多嘉良　憲	1902	札幌農学校	予修科	第一年級	予科
	1903	札幌農学校	予修科	第二年級	
	1904	札幌農学校	予修科	第二年級	
	1905	札幌農学校	本科	第一年級	学部
	1906	札幌農学校	本科	第二年級	
	1907	東北帝国大学農科大学	農学科	第三年級	
	1908	東北帝国大学農科大学	農学科	第三年級	

１．北海道帝国大学に入学した沖縄出身者一覧

『北海道帝国大学一覧』などにより見出した沖縄出身者の氏名などを一覧とし、＜表＞に示した。その＜表＞にみられるように、22名の沖縄出身者が北海道帝国大学に入学したのであった（うち２名は函館高等水産学校への入学、以下この断りは記さない）。

この＜表＞に掲げた事項のうち、左から順に年、在籍学校・大学名、在籍学科等の３項目については、『北海道帝国大学一覧』などに掲載されている「学生及生徒姓名」から本籍地が沖縄となっている学生生徒の情報を抽出したものである。次の在学課程の欄は、北海道帝国大学にあった三つの課程、すなわち専門課程、高等普通教育課程、実業専門教育課程の別を示すものであり、北海道帝国大学期の呼称によって、それぞれを学部、予科、専門部と表記した。札幌農学校本科についても「学部」と記すなど歴史的表記として正確ではないけれども、課程の性格を示すものとして理解されたい。その次の卒業・中退の欄は、それぞれの課程を卒業したかどうかを示した。卒業と記したものは『北海道帝国大学一覧』などの「卒業生姓名」によって卒業が確認できるものであり、中退と記したものは最終学年まで進級していないものと卒業生名簿などに氏名を確認できないものとがある（後者の１事例についてはその旨を備考欄に記した）。その次の専攻の欄は、在学した課程を現在の学部に相当するもので示したものである。最後の入学前歴の欄は、前述のように北海道大学および沖縄県内の中等学校の資料に基づいて判明したものである。

卒業・中退	専攻	入学前歴	備考
卒業	農学	1899年５月　第一高等学校第二年級在学	札幌農学校予修科第二年級に入学。
卒業			
卒業	農学	1899年３月　沖縄県尋常中学校卒業 1899年５月～1900年３月　国民英学会 1900年４月　正則英語学校入学	本科第三年級のとき、特待生。なお、在学中に改名している。
卒業			
卒業	農学	1902年３月　沖縄県立中学校卒業	
卒業			

氏名	年	在籍学校・大学名	在籍学部等	在籍年級等	在学課程
宮城　源幸	1906	札幌農学校	林学科	第一年級	専門部
	1907	東北帝国大学農科大学	林学科	第二年級	
	1908	東北帝国大学農科大学	林学科	第三年級	
古堅　宗昌	1907	東北帝国大学農科大学	大学予科	第一年級	予科
	1908	東北帝国大学農科大学	大学予科	第二年級	
	1909	東北帝国大学農科大学	大学予科	第三年級	
	1910	東北帝国大学農科大学	畜産学科	第一年級	学部
	1911	東北帝国大学農科大学	畜産学科	第二年級	
	1912	東北帝国大学農科大学	畜産学科	第三年級	
安次富　松蔵	1907	東北帝国大学農科大学	大学予科	第一年級	予科
	1908	東北帝国大学農科大学	大学予科	第二年級	
	1909	東北帝国大学農科大学	大学予科	第三年級	
	1910	東北帝国大学農科大学	農学科	第一年級	学部
	1911	東北帝国大学農科大学	農学科	第一年級（ママ）	
	1912	東北帝国大学農科大学	農学科	第三年級	
奥間　源蔵	1909	東北帝国大学農科大学	土木工学科	第一年級	専門部
	1910	東北帝国大学農科大学	土木工学科	第一年級	
	1911				
	1912	東北帝国大学農科大学	土木工学科	第三年級	
比嘉　賀成	1912	東北帝国大学農科大学	水産学科	第一年級	専門部
渡久地　政達	1918	北海道帝国大学	附属土木専門部	第一年級	専門部
	1919	北海道帝国大学	附属土木専門部	第二年級	
	1920	北海道帝国大学	附属土木専門部	第三年級	
翁長　俊郎	1922	北海道帝国大学	附属大学予科	第一年級	予科
亀川　恵信	1922	北海道帝国大学	附属大学予科	第一年級	予科
	1923	北海道帝国大学	附属大学予科	第二年級	
	1924	北海道帝国大学	附属大学予科	第三年級	
	1925	北海道帝国大学	医学部	第一年目	学部
	1926	北海道帝国大学	医学部	第二年目	
	1927	北海道帝国大学	医学部	第三年目	
	1928	北海道帝国大学	医学部	第四年目	
謝花　寛三	1923	北海道帝国大学	附属水産専門部	第一年級	専門部
	1924	北海道帝国大学	附属水産専門部	第一年級	
	1925	北海道帝国大学	附属水産専門部	第二年級	
	1926	北海道帝国大学	附属水産専門部	第三年級	
屋良　朝美	1924	北海道帝国大学	附属大学予科	第一年級	予科
	1925	北海道帝国大学	附属大学予科	第一年級	
仲吉　朝贇	1924	北海道帝国大学	附属水産専門部	第一年級	専門部
	1925	北海道帝国大学	附属水産専門部	第一年級	
	1926	北海道帝国大学	附属水産専門部	第二年級	
	1927	北海道帝国大学	附属水産専門部	第三年級	

卒業・中退	専攻	入学前歴	備考
卒業	農学	1905年３月　沖縄県立中学校卒業	
卒業	農学	1906年３月　沖縄県立中学校卒業	
卒業			
卒業	農学	1907年３月　沖縄県立中学校卒業	
卒業			
卒業	工学	（不明）	1911年については生徒名簿に氏名を見出すことはできないが、在学していたものと思われる。
中退	水産	1912年３月　沖縄県立第一中学校卒業	
卒業	工学	1917年３月　沖縄県立第一中学校卒業	
中退		1919年３月　沖縄県立第一中学校卒業	
卒業	医学	1918年３月　沖縄県師範学校卒業	
卒業			
卒業	水産	1920年３月　沖縄県立水産学校卒業	
中退		1924年　東京府立第一中学校検定	
卒業	水産	1922年３月　沖縄県立第一中学校卒業	

氏名	年	在籍学校・大学名	在籍学部等	在籍年級等	在学課程
池間　昌修	1926	北海道帝国大学	附属水産専門部	第一年級	専門部
大城　豊彦	1929	北海道帝国大学	予科	第一学年	予科
	1930	北海道帝国大学	予科	第二学年	
	1931	北海道帝国大学	予科	第二学年	
	1932	北海道帝国大学	予科	第三学年	
吉田　陽	1931	北海道帝国大学	附属水産専門部	第一学年	専門部
	1932	北海道帝国大学	附属水産専門部	第二学年	
	1933	北海道帝国大学	附属水産専門部	第三学年	
新里　松吉	1934	北海道帝国大学	理学部数学科	第一年目	学部
金城　一雄	1936	北海道帝国大学	予科	第一学年	予科
	1937	北海道帝国大学	予科	第二学年	
	1938	北海道帝国大学	予科	第三学年	
	1939	北海道帝国大学	理学部物理学科	昭和十四年入学	学部
	1940	北海道帝国大学	理学部物理学科	昭和十四年入学	
	1941	北海道帝国大学	理学部物理学科	昭和十四年入学	
	1942	北海道帝国大学	理学部物理学科	昭和十四年入学	
大城　雄一	1937	北海道帝国大学	予科	第一学年	予科
	1938	北海道帝国大学	予科	第二学年	
	1939	北海道帝国大学	予科	第三学年	
	1940	北海道帝国大学	医学部	昭和十五年入学	学部
	1941	北海道帝国大学	医学部	昭和十五年入学	
	1942	北海道帝国大学	医学部	昭和十五年入学	
	1943	北海道帝国大学	医学部	昭和十五年入学	
山口　清	1937	函館高等水産学校		第一学年	専門部
	1938	函館高等水産学校		第二学年	
	1939	函館高等水産学校		第三学年	
源河　朝之	1939	函館高等水産学校		第一学年	専門部

［出典］『札幌農学校一覧』、『東北帝国大学農科大学一覧』、『北海道帝国大学一覧』、『函館高等水産学校一覧』各年版。その他、北海道大学大学文書館所蔵史料など本文に記したとおり。
［注］年については、1919年まではその年の９月から翌年の７月まで、1920年は同年７月から翌年３月まで、1921年からはその年の４月から翌年の３月までである。

２．北海道帝国大学に入学した沖縄出身者の特徴

⑴　入学時期

北海道帝国大学に入学した沖縄出身者を年ごとの在学者数としてみれば最大でも４名であった[26)]。1902～1912年の３名前後および1924～1926年の４名が小さな山となっているものの、それらの時期においてさえ入学者数では年あたり２名以下であった。

卒業・中退	専攻	入学前歴	備考
中退	水産	1923年３月　沖縄県立水産学校卒業	
卒業		（不明）	予科卒業後の北海道帝国大学の学部進学については確認できない。
卒業	水産	1930年３月　沖縄県立第二中学校卒業	
中退	理学	時期不明　文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験	
卒業	理学	（不明）	卒業生名簿に氏名がなく、卒業できなかったものと思われる。
中退			
卒業	医学	1935年３月　沖縄県立第二中学校卒業	
卒業			
卒業	水産	1937年３月　沖縄県立第二中学校卒業	
卒業	水産	1939年３月　沖縄県立水産学校卒業	

北海道帝国大学の学生生徒数は、1900年の258名から、大学への昇格、学部などの増設というなかで、1920年に1000名を、1926年に2000名を、1942年に3000名を超えていったが[27]、沖縄出身者はそのような学生生徒の増加という大学の状況とはほぼ無縁であったのである。他の高等教育機関への進学者数を明らかにしたうえで比較検討すべきだが、沖縄から高等教育機関に進学しようとするとき、北海道帝国大学は選択肢として映じていたとは言い難いといえるだろう。

⑵　入学課程

彼ら22名が学んだ課程は、学部入学者は９名、専門部入学者は10名、予科入学者は11名（うち８名が学部に進学）である。このように学部に入学した人の比率は決して高いものではなかった。

入学した課程をその時期と重ねて整理し、全国的な高等教育機関の拡充とほぼ重なる北海道帝国大学としての独立（1918年）を境にしてみれば、学部入学者は独立以前５名と独立以後４名、専門部は独立以前３名と独立以後７名であった。

北海道帝国大学の全学的な学生生徒数の割合はおおよそ次のようであった。独立以前は、たとえば1910年には農科大学学生（学部）130名、実科生徒（専門部）366名であったように、専門部の割合が大きい。それに対して独立以後は、医学部、工学部、理学部が設置されていくことに伴い、たとえば1926年には学部学生717名、専門部生徒428名であったように、学部学生の割合が大きくなっていった[28]。学部学生の割合が大きくなっていくなかにあって、沖縄からの入学者は、むしろ専門部生徒の割合が高まっていっていたのである。

⑶　卒業と中退

入学者22名のうち、学部２名、専門部２名、予科２名、合計６名が中退していた。

管見の限り、北海道帝国大学の中退に関する調査研究はなされておらず、山田博司による1890年予科入学者31名のうち５年間で課程を終えた人が10名に過ぎなかったことの指摘がもっとも参考になる状況にある[29]。ただし、これも中退率が70％であることを意味するものでないことは言うまでもなく、したがって沖縄からの入学者のうち約30％が中退したことの高低については留保せざるをえない。

それでも、これらの中退は次のような事態であったことが予測される。中退した６名のうち沖縄県立第一中学校の卒業生である比嘉賀成と翁長俊郎については、同校の同窓会名簿に、それぞれ早稲田大学と東京外国語学校が最終学校であることが記載されている[30]。そして翁長は、1923年に東京外国語学校の英語部文科第一学年に在学していた[31]。すなわち、沖縄県立第一中学校卒業後、北海道帝国大学の予科や専門部に進学したものの１年で退学し、他の高等教育機関に転じたという履歴であり、中退というよりも転学というべきものであった。その他の中退者も多くが１年の在学で中退していることから、比嘉や翁長と同様の履歴であると考えることもできるであろう。

⑷　専攻分野

入学者22名の専攻分野を、現在でいうところの学部程度の大きな括りで整理すれば、水産学７名、農学６名、医学２名、工学２名、理学２名と、水産学の専攻者が最多であった。水産学専攻の７名は、いずれも専門部への入学であり、沖縄からの入学者が専門部に多かったという傾向を反映していると同時に、そのような傾向を生む要因ともなっている。そして、前述したように1920年代半ば以降、沖縄の教育界・政界は沖縄に高等教育機関とりわ

け水産学校の設置を要請しており、水産学への学習要求は沖縄に一定程度存在していたものと思われること、にもかかわらず水産学を学べる高等教育機関が存在しなかったことが、水産学の専攻者が最多となる要因であったといえよう。

ここで再び北海道帝国大学としての独立を境にしてみれば、独立以前は入学者８名中６名が農学の専攻であったのに対し、独立以後は農学部および農学実科、林学実科において農学を学んだ人は皆無となり、水産学６名、医学２名、工学２名、理学２名と、農学以外の各分野を専攻していた。農学から農学以外の専攻へという変化が顕著に見られるのである。その事情として、近代日本における高等教育機関の拡充、なかでも農学に関する研究・教育機関の設置によって、札幌まで行かなければ農学を学ぶことができないという環境が解消したことがあったと考えられる[32]。九州帝国大学農学部が1919年に、京都帝国大学農学部が1923年に、台北大学理農学部が1928年に設置されるとともに、1908年に鹿児島高等農林学校、1924年に宮崎高等農林学校、1927年（前身を含めれば1919年）に台北高等農林学校などが設置されたのである。北海道帝国大学以外への入学は機会を改める必要があるものの、断片的に示しておけば、1924年に九州帝国大学農学部林学科、同年に宮崎高等農林学校への入学者があった[33]。北海道帝国大学農学部も、農学実科や林学実科も、これらの大学、学校と競合した結果として、沖縄からの入学者がいなくなったものといえよう。

⑸　個々の入学経緯

①宮城鉄夫をはじめとする沖縄県立第一中学校からの入学

沖縄県尋常中学校、沖縄県立中学校、沖縄県立第一中学校は同一校なので（注７参照）、在学者数が小さな山を築く1902～1912年における北海道帝国大学入学者８名中６名が同校の卒業生であった。

沖縄にあって、九州、本州を通り越して北海道へ、札幌農学校、北海道帝国大学へという進学はどのような契機によりなされたのであろうか。進学先は多様な要因が絡まって確定するので決定的な要因は特定できないが、札幌農学校、北海道帝国大学を知り、進学先として浮上する経緯については指摘できよう。

菅原亮芳にかかる進学案内書の研究によれば、「明治20年代が東京中心の案内書であったが、30年代に入ると地域的広がりをみせ、全国の諸学校を紹介する案内書が登場する」[34]という。それでも菅原の作成した進学案内書目録によれば、依然として『東京遊学案内』『東京入学便覧』のように東京を中心とする案内書が多く刊行され続けていた[35]。このような書籍による進学、学校情報に加えて、進学先の決定にあたっては具体的な人を介しての情報が重要であったのではないだろうか。ある卒業生が進学した高等教育機関が、中等学校やその教員と生徒に情報として蓄積されるや、進学しようとする人に具体的な選択肢の一つとして浮かび上がるのではないだろうか。すなわち、多嘉良憲には宮城源栄という先輩が切り開いた道があり、そして宮城や多嘉良がそれ以降の先輩として映じ、語られていくということである。このことに関して具体的な史料で跡づけておこう。

そのような歴史が作られたとするならば、沖縄県立第一中学校からの最初の進学者である宮城源栄（鉄夫）の場合が重要である[36]。彼の札幌農学校進学に関する経緯は、よく知られており[37]、それは平塚直治による回想「宮城鉄夫君を憶う」によっている[38]。平塚は札幌農学校を1896年７月に卒業後、青森県尋常中学校教諭を経て、1898年10月に沖縄県尋常中学校教諭に赴任した人物である[39]。平塚が沖縄県尋常中学校に赴任したとき、宮城源栄は同校五年生、卒業間近であった。平塚の回想によれば、平塚は宮城の物理などの科目を担当しており、宮城が平塚の宿を訪ねるなどの交流もあり、その末に宮城は平塚の出身校である札幌農学校への入学を志願することとなった。宮城にとって、札幌農学校という高等教育機関は、平塚を介して知り、志すこととなった道であることは疑いないところである。

こうして沖縄県立第一中学校にもたらされた札幌農学校への進学という道は、入学者たちが帰省し、学習や生活の様子を語ることによって、同校在校生たちに共有されることになったものと思われる。その一コマを沖縄県立中学校学友会雑誌『球陽』に見出すことができる。

1905年８月17日、学友会同窓懇親会が開催され、同校在学生の過半と考えられる300名余が参集するなか、たまたま来沖していた学習院教授中村進午の講話とあわせて、卒業生５名の演説がなされた。卒業生の進学先は、第一高等学校、第七高等学校造士館、札幌農学校、大阪府立高等医学校であった（１名は不明）[40]。その演説を聞いた一生徒は、「札幌農学校の多嘉良憲君が北海道の談話頗る面白し」[41]と記している。ときに多嘉良は予修科を経て、本科第一年級を終えたところであり、札幌農学校での学習だけでなく、沖縄では想像しがたい北海道での生活についても興味深く話したことであろう。そしてこの会を準備したと思われる学友会演説部の幹事には、古堅宗昌が名を連ねていた[42]。

札幌農学校を卒業した平塚直治の教師としての赴任に始まる沖縄県立第一中学校から札幌農学校への進学の道はこのように伝えられていったものと思われる。しかし、進学実績にみる限り、この継承は長続きせず、1907年沖縄県立中学校卒業、同年東北帝国大学農科大学大学予科入学の安次富松蔵で途切れてしまう。その後は具体的な人による情報はなくなったままであったように思われる。

②亀川恵信の場合

亀川恵信は、沖縄県師範学校予備科を経て、1918年３月に同校本科第一部を卒業した[43]。回想によれば[44]、師範学校卒業後の最初の赴任地は座間味小学校であった。その赴任当初から進学を希望しており、1919年３月には転勤辞令を待たずに那覇へ発ち、その滞在中、明治法律学校在学中の親類から東京の学生生活を詳しく聞き、いっそう上京を志したようである。転勤辞令のないまま那覇にとどまり、欠勤を続けたのち、1919年度中に第二豊見城小学校を経て、出身地である宮古島の下地小学校に異動した。この間も志を東京に持ち続け、1920年３月には退職し、ただちに上京した。そして東京府下の二つの小学校でそれぞれ一年弱勤めたのち1921年12月に退職し、進学準備に専念した。この回想では、どのような受験をしたのかは語られていない。それでも、高等学校および大学予科の基本的な入

学資格である中学校第四学年修了をもっていなかった亀川は、まず専門学校入学資格検定に合格するなどの資格を得て、それから大学予科の受験をしなければならなかったはずである。亀川が望んでいたであろう東京での学生生活は叶わなかったが、師範学校在学中から持ち続けていたと思われる専門的な学習への欲求はようやく札幌の地で果たされることとなった。1922年４月、「希望に燃えて津軽海峡を渡り北海道の札幌で勉学の途に」ついたのであった[45]。なお亀川の向学心は北海道帝国大学医学部卒業後も衰えることはなく、1941、1942の２年間、台北帝国大学大学院学生として「内科学領域ニ於ケル血清」をテーマとして研究し、その後も医学に関する論文や著書を執筆した[46]。

むすび

⑴　明らかにしたこととその考察

本稿は『北海道帝国大学一覧』などを史料とすることにより、北海道帝国大学に入学した沖縄出身者22名を見出し、彼らの学んだ時期、課程や専攻などを明らかにした。それにより、高等教育機関の拡充期とほぼ重なる北海道帝国大学としての独立を境として、①北海道帝国大学全体では専門部生徒に比して学部学生の割合が高まっていくのに、沖縄出身者ではむしろ専門部生徒の割合が高まっていったこと、②中途退学者が多かったこと、③当初は農学を専攻する人が多かったのに、のちには水産学をはじめとした農学以外の各分野の専攻へと移っていったこと、これらを明らかにすることができた。

これらの諸点は、高等教育機関の拡充を共通の事情として生じたものといえよう。本文でも記したように、農学の研究教育にあたる大学、高等農林学校が九州、本州、台湾に設置されていくなかで、沖縄出身者が農学を学ぶためにわざわざ北海道へ進学する必要性がなくなっていったと考えられる。その一方で、水産学の場合には、北海道帝国大学附属水産専門部と競合するような高等教育機関は農商務省管轄の水産講習所（東京）のみであったため、水産学を学びたい場合には北海道へ進学することも当然の選択肢であったであろう。このような競合する教育機関の配置状況のなかで、水産学を中心に農学以外の専攻に入学者があり、そのことが結果として専門部の割合を高めることとなったと考えられる。そして、官公私立のさまざまな高等教育機関が並立するなかで、中退して他大学などに転じる人も生じたといえよう。

⑵　今後の課題

本稿が明らかにした上述の点を確定していくためには、引き続き北海道帝国大学以外の帝国大学および官公私立大学をはじめとする高等教育機関への進学者について調査していくことが求められる。これは、本稿で対象を限定したことに対応して、当然なされるべき今後の課題である。

一方、北海道帝国大学で学んだ22名のうち、農業指導者としての宮城鉄夫、沖縄県産業

組合連合会会長としての宮城源幸、農政研究者の安次富松蔵、医師としての亀川恵信のように４名が、『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社、1983年、全４巻）に項目としてとりあげられ、沖縄への功績がすでに知られている。筆者の関心からすれば、この４名にとどまらず今回見出した全22名について、在学中および卒業後の活動を明らかにしていくことが課題として位置づく。『北海道帝国大学新聞』など北海道大学にかかわる史料とともに、沖縄県立第一中学校の校友会誌『養秀』など沖縄の中等学校・師範学校にかかわる史料、そしてそれぞれの同窓会関係資料から、彼らの歩みを復元していく予定である。

今後これらの解明を行ない、沖縄出身者がどのような高等教育機関への進学の道を展望しえたのかとともに、自然科学の研究を含めた沖縄学・沖縄研究の裾野を明らかにしていきたい。

〔注〕

１）　本稿では、帝国大学および大学のみならず、高等学校、大学予科そして実業専門学校も含めて高等教育機関として把握している。それらの組織は、帝国大学令（1886年勅令）のほか、高等学校令（1894年勅令）、専門学校令（1903年勅令）、大学令（1918年勅令）などに法的根拠をもっている。

２）　安良城盛昭『新・沖縄史論』沖縄タイムス社、1980年、338～339頁。

３）　琉球処分直後に沖縄県庁が新たに学校を設置したり、琉球王国期からの教育機関を改編したりしていく状況については、拙稿『近代沖縄における教育と国民統合』北海道大学出版会、2006年、第一章および「近代教育の導入」、沖縄県文化振興会史料編集室編『沖縄県史　各論編５　近代』沖縄県教育委員会、2011年を参照されたい。

４）　管見の限り、1925年３月に沖縄県師範学校長であった北村重敬を代表者とする「沖縄県ニ国立学校設置ノ請願」が衆議院において議決されたことを嚆矢とする（「沖縄県ニ国立学校設置ノ請願」、『議院回付請願書類原議　自大正十四年至大正十五年』十二、国立公文書館所蔵）。その後、1927年６月に沖縄で開かれた九州沖縄八県連合教育会では、討議題の一つとして「沖縄県に官立実業専門学校を設置せられんことを其の筋に建議すること」が可決され（松本鍍三郎ほか「第八回九州沖縄八県連合教育会出席報告」、『大分県教育』第506号、1927年12月、73～74頁）、また1930年５月に熊本県で開催された同会では沖縄県教育会から「沖縄県に国立水産学校設立促進を其の筋に建議の件」が提出され、原案が可決される（「九州沖縄八県連合教育会」、『熊本教育』第244号、1930年６月、53頁）など、官立専門学校とくに水産学校を沖縄県に設置する趣旨の建議あるいは請願を1943年開催の同会までほぼ継続して決議している。なかには衆議院の議決を経て内閣総理大臣に意見書を提出したことも確認できる（「新潟県ニ総合大学設立ノ請願ニ関スル件外七件」、『公文雑纂』昭和十五年　巻六十四　帝国議会七　請願四、国立公文書館所蔵）。「高等諸学校創設及拡張計画」以降の沖縄での高等教育機関の誘致運動については別稿を期したい。

５）「県費留学生」に関して、阿波根朝松「育英奨学」、琉球政府『沖縄県史』第４巻、1966年など、また伊波普猷に関して、鹿野政直『沖縄の淵』岩波書店、1993年など。

６）　納富香織「初期沖縄留学生の軌跡」、前掲『沖縄県史　各論編５　近代』。

７）　同校は、琉球王国期の国学を源流とし、琉球処分直後の1880年に首里中学校とされ、その後、沖縄尋常中学校（1886年）、沖縄県尋常中学校（1887年）、沖縄県中学校（1899年）、沖縄県立中学校（1901年）、沖縄県立第一中学校（1911年）と改称されている。なお沖縄県立第二中学校は、1910年に沖縄県立中学校の分校として設立され、1911年に独立校となったものである。

８）　沖縄県立第一中学校学友会編『養秀』創立40周年記念号、1921年。沖縄県立第一中学校・沖縄県立

首里高等学校同窓会編『社団法人養秀同窓会会員名簿』1980年。

9） 前掲、納富「初期沖縄留学生の軌跡」267頁。

10） 島袋源一郎の生涯を概観したものとして、高良倉吉「島袋源一郎論―その沖縄研究と天皇制イデオロギーに関する覚書」、『新沖縄文学』第33号、沖縄タイムス社、1976年。

11） 新城栄徳『文人・末吉麦門冬』琉文、1984年。粟国恭子「近代沖縄の芸術研究①－末吉安恭（麦門冬）と鎌倉芳太郎」、『沖縄芸術の科学』第19号、2007年。

12） 屋嘉比収『＜近代沖縄＞の知識人　島袋全発の軌跡』吉川弘文館、2010年。

13） 屋嘉比収「郷土研究の興隆」、前掲『沖縄県史　各論編５　近代』。とはいえ、沖縄や台湾において研究していた人々については基礎資料も整備されていない状況にある（前掲、屋嘉比『＜近代沖縄＞の知識人』６頁）。

14） この裾野として高等教育機関進学者のみが想定されるわけではない。小学校教員は、研究成果の読み手として、また調査研究の担い手としても重要であった。たとえば、小学校教員が会員の多くを占めた沖縄県教育会の機関誌『沖縄教育』第199号（1933年２月）は、「郷土史特輯号」であり、当時東京府立高校教授であった東恩納寛惇の「本県郷土史の取扱に就いて」という講演記録などと並んで、小学校教員であった嘉数正助「島尻郡郷土史断片」などが掲載されていた。

　他方では、これまでにも注目されている人々についてのさらなる研究も必要であると考えており、拙稿「沖縄県教育会附設郷土博物館の設立過程」（ヨーゼフ・クライナー編著『日本民族学の戦前と戦後―岡正雄と日本民族学の草分け』東京堂出版、2013年刊行予定）では、1930年代に沖縄県教育会が設立する郷土博物館の設立過程とその資料収集および展示について、中心人物であった島袋源一郎の活動に注目して考察を行なった。なお同館設立に伴う資料収集過程には、札幌農学校卒業生である宮城鉄夫と古堅宗昌も関与が見られる。

15） 筆者が北海道大学に勤務し大学文書館の運営にもかかわっているとともに、主に１・２年生を対象とする全学教育科目として「北海道大学の歴史」を担当していることとかかわる。

16）『北大百年史』通説、1982年、106頁、195頁、243頁。許晨「北海道帝国大学の中国人留学生」、『北海道大学大学文書館年報』第５号、2010年。

17）『北海道帝国大学一覧』の刊行状況により、1944年および1945年の入学者は不明とせざるをえない。なお、『北海道帝国大学新聞』第299号、1944年３月21日付２面「本年度合格者氏名」（『北海道大学新聞』第３巻、大空社、1989年）に、1944年度予科入学試験の合格者一覧が出身地を付して掲載されているが、そのなかには沖縄出身者は見いだせない。

18） そのほかにも婚姻や養子に伴う転籍などもある。

19） 筆者による東京帝国大学を対象とした同様の方法による調査（未公表）によれば、帝国大学入学後（多くの場合卒業年次）において沖縄県へ転籍している事例が散見された。

20）『北海道帝国大学一覧』自大正九年至大正十一年、231頁および235頁。

21） 同上242頁。

22） 組織名称はしばしば変更が加えられており煩雑である。それらについて、北海道大学125年史編集室編『北大の125年』北海道大学、2001年、128～129頁に掲載されている資料「部局の変遷」が簡便に整理している。

23）「水産学部」、北海道大学『北大百年史』部局史、1980年、1073～1087頁、1097～1101頁。

24） 刊行状況にしたがい、1940年度以降の入学者については不明とせざるをえない。

25） 北海道帝国大学に女子学生が入学したことに関する研究がこれまでになされているが（逸見勝亮「女性の入学」、『北大の125年』北海道大学、2001年。山本美穂子「北海道帝国大学理学部における女性の入学」、『北海道大学大学文書館年報』第１号、2006年など）、沖縄出身の女子学生はいない。なお、戦前期における沖縄出身女性の高等教育機関での学びにかかわって、小林多寿子・高橋順子ほか「日本

女子大学卒業生調査－沖縄県出身者を対象にして」、『日本女子大学総合研究所紀要』第13号、2010年がある。

26）府県別に比較した場合、ほとんどの年において最少である。

27）「統計」、前掲『北大百年史』通説、135～138頁、141～144頁、152～183頁。

28）同時に、予科生徒の割合も大きなものとなっていた。1926年の場合、予科生徒は874名であった。

29）山田博司「札幌農学校の再編」、北海道大学『北大百年史』通説、1982年、107頁。

30）沖縄県立第一中学校・琉球政府立首里高等学校同窓会編『社団法人養秀同窓会会員名簿』養秀同窓会、1971年。同書の閲覧に際しては、立教大学池袋図書館に便宜を図っていただいた。記して感謝したい。

31）『東京外国語学校一覧』自大正十二年至大正十三年、89頁。

32）高等教育機関の拡充期は、沖縄にあっては「ソテツ地獄」と呼ばれる第一次世界大戦後の不況期であり、それゆえ遠隔地に進学することは家計の面からもより避けられたのではないだろうか。

33）『九州帝国大学一覧』自大正十三年至大正十四年、265頁。『宮崎高等農林学校一覧』自大正十五年至昭和二年、134頁。

34）菅原亮芳「明治期における『学び』と進学案内書」、菅原編『受験・進学・学校』学文社、2008年、184頁。

35）菅原亮芳「近代日本における進学案内書の文献目録（未定稿、1883～1946年）」、同上『受験・進学・学校』348～352頁。

36）宮城鉄夫以前に札幌農学校に入学している黄金井解三について、1895年９月に第一高等学校に入学したことは確認できたものの（『第一高等学校本部一覧』自明治廿八年至明治廿九年、123頁）、それ以前の経歴については不明である。

37）仲泊良夫「農業の改革家　宮城鉄夫」、仲泊著『琉球偉人伝』大同印刷、1969年、316～318頁。知念節子「産業改善の一大恩人　宮城鉄夫」、沖縄県偉人研究会編『新版　沖縄の偉人伝』沖縄時事出版、1973年、57～60頁。金城功「沖縄農業への情熱－宮城鉄夫」、『青い海』通巻第61号、青い海出版社、1977年、103～104頁など。

38）宮城鉄夫顕彰会編『宮城鉄夫』おきなわ社、1956年、106～114頁（初出は1935年）。

39）平塚直治の札幌農学校での学びを含む生涯については、山本美穂子「平塚直治受講ノート（西信子・西安信氏寄贈）をめぐって－札幌農学校第14期生の学業史」、『北海道大学大学文書館年報』第２号、2007年を参照されたい。

40）渡久地政佐「学友会同窓懇親会」、沖縄県立中学校学友会『球陽』第15号、1906年11月、81～82頁。「雑報」、同上『球陽』第15号、114頁。

41）前掲、渡久地「学友会同窓懇親会」82頁。

42）「沖縄県立中学校学友会役員」、同上『球陽』第15号、115頁。

43）『大正十一年一月　入学志願者名簿』帝大簿書171、北海道大学大学文書館所蔵。また『沖縄県師範学校一覧』1914年３月に掲載されている生徒氏名欄に、予備科生徒として記載されていた。それは、順調にいけば1918年３月に沖縄県師範学校本科第一部を卒業する学年を意味するものである。

44）亀川恵信「教員時代の想い出」、亀川恵信・亀川孝子『随想録』私家版、1953年、216～240頁。

45）亀川恵信「或夏休みの想い出」、同上『随想録』240頁。

46）『台北帝国大学一覧』昭和十六年、225頁。『台北帝国大学一覧』昭和十七年、235頁。亀川恵信『長寿の研究』宮古高等学校第九期卒業虎の会、1979年。

（こんどう　けんいちろう／北海道大学大学院教育学研究院准教授）